

中世前期バルト南岸のスラヴ人 交易地について

市 原 宏 一

I) は じ め に

交易地 trading place, handelsplatz と呼ばれる大規模集落遺跡について、中世前期の北欧・西欧に関して近年進められている研究は、バルト海全域にも広くその対象を広げている¹⁾。ポーランド北西部からユトランド半島までのバルト南岸の定住史研究においても熱心にこうした取り組みは行われており、この定住地の類型を北西スラヴ人定住地域にも認め、同地域における都市化、都市形成に関わる論議の中に位置づけ直そうと試みられている。本稿はバルト南岸における近年の研究成果をふまえながら、北海・バルト海地域の広がりの中で交易地を捉えて、その特色の析出を通じて、北西スラヴ社会の歴史的展開において交易地が持つ意味を明かにする。

エルベ・オーデル間北西スラヴ人定住地において、遺構の規模と質、遺物の量と質で従来注目されてきたのは、防備施設を伴う大規模集落（防備定住地）である。ここでは定住地の形成と同時に防備があり、特に10世紀以降では、活発な手工業・交易活動の跡が残るとともに、居住者によるところの排他的な利用が推定できた。これに対してバルト南岸の若干の定住地遺跡では、防備定住地と同様ないしはそれを上回る大規模な手工業・交易活動の痕を残していながらも、防備の欠けた、あるいは少なくとも定住地成立の当初には全く防備を欠

1) バルト海・北海の交易地に関わる代表的な論稿としては、Callmer [7], Ambrosiani/Clarke [2], Herrmann [19]

落させた大集落が見いだされた。バルト南岸の場合、交易地の形成はスラヴ人の定着とほぼ同時であり、遅くとも8世紀には活発な手工業・交易活動の展開が見て取れる。しかしながら当該地点での交易地としての定住は短く、9世紀頃に交易地自体に防備施設が設けられて定住が継続されるか²⁾、そうでない場合には付近にある防備定住地にその機能が移行するか、新たに付近に防備定住地が形成され、10世紀までに先行した交易地は放棄される。

現在までのところエルベ・オーデル間のバルト南岸では、メンツリン Menzlin, ラルスヴィーク Ralswiek, ロストック＝デイルコウ Rostock-Dierkow, グロース＝シュトロームケンドルフ Groß Strömkendorf の4カ所にこうした大集落がみとめられる³⁾。(図I参照)本稿はこれらの内、1990年代に入ってからその成果が明らかにされた後2者を検討するが、その理由は単により新しい事例であるというばかりではない。この2交易地遺跡は、考古学上でのみ確認されてきた交易地とは異なり、文献史料との関わりが見いだされるのである。従来見いだされた交易地は同時代史料のみならず、スラヴ期とそれに引き続く時代にも史料言及がないが、本稿で扱う2交易地遺跡は記述史料で何らかの言及が認められる。

ロストック＝デイルコウは11世紀には放棄されるが、南西に数km離れたヴァルノウ対岸に防備施設などが設けられ、13世紀初頭にはリューベック都市法が付与されたロストックとして文書史料に現れる。ロストック＝デイルコウは中世都市ロストックと立地点が完全に重なっているわけではないが、その歴史的前身と見なされている⁴⁾。

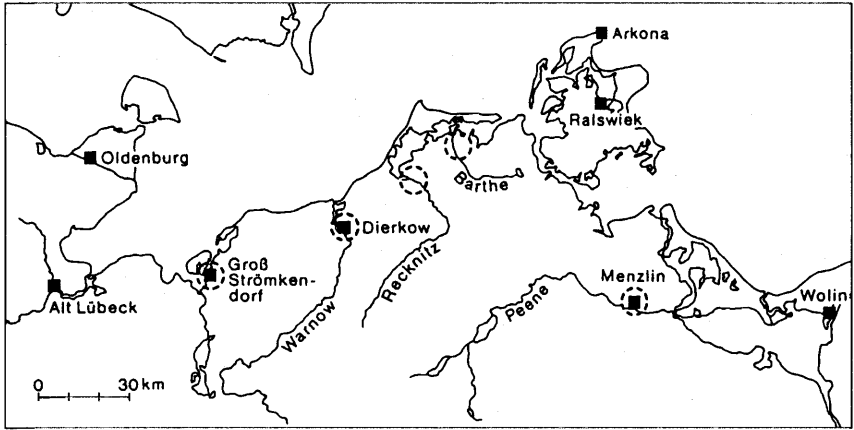
グロース＝シュトロームケンドルフはエルベ・オーデル間の交易地では唯一史料上の地名との比定がほぼ確定されている。【フランク帝国年代記】に記

2) 防備定住に展開する西ポンメルンの交易地については市原 [43]

3) ラルスヴィーク: Herrmann [16], メンツリン: Schoknecht [29]

4) Warnke [36], S.79-80.

(3) 中世前期バルト南岸のスラヴ人交易地について



図I バルト南岸大規模防備定住と交易地

されているオボドリト人の中心的交易地 Reric がそれである。同年代記によると、808年オボドリト地域に侵入したデーン王ゴドフリドは、オボドリト有力者を屈服させ、「彼の帰還前に海岸にある交易地を破壊した、これはデーン語で Reric といい、貢租の徴収による莫大な利益を彼の王国に与えた。そしてそこから商人たちを連れ去り、スリエストルプ（シュレスヴィヒ）と呼ばれる港へ全軍とともに艦隊で移動した。」（*Godofridus vero, priusquam reberteretur, distructo emporio, quod in oceani litore constitutum lingua Danorum Reric dicebatur et mangam regno illius commodiatatem vectigalium, persolutione praestabat, translatisque inde negotiatoribus, soluta classe ad portum, qui Sliesthorp dicitur, cum universo exercitu venit.*）⁵⁾ この記述から明らかになるのは、交易地レーリックが9世紀はじめ

5) なお、そこから商人たちが連行された後、809年にもなお「オボドリト人のトラツコ侯が交易地レーリックでゴドフリドの臣下により騙されて殺された」とレーリックへの言及があることから、拠点としての定住地自体の放棄が正確に何年であるかには若干の幅が考慮される。Annales regni francorum [1], S.88.

オボドリト人定住地域のバルト海岸に位置するという点である。

従来複数の地点がレーリック場所として論議されてきた。オボドリト人地域の中心地として同時代の他の史料で言及されたメクレンブルク、交易遺物や多様な手工業活動址の残るオルデンブルクとアルト＝リューベック、若干の遺物の発見からレーリック Rerik と改名された旧アルト＝ガーツが挙げられている⁶⁾。しかしこれらは立地と考古学成果の点において史料記述と齟齬をきたす。メクレンブルクは海岸から10km以上内陸に入っており、バルト沿岸という史料記述とくいちがう。オルデンブルクやアルト＝リューベックはオボドリト人の1支族であるヴァグリア人地域に位置しており、オボドリト人全体の中心から西にずれ、より中心部に近い後者の場合でも、その建造年は年輪年代測定により早くとも817年以降と判定され、史料と合致しない。同様にレーリック Rerik も、出土する土器のほとんどがスラヴ中期、すなわち9世紀以降と編年され、史料の年代とくいちがう。

従来推定された地点とは異なり、グロース＝シュトロエームケンドルフはレーリックの史料叙述と最も合致する。地理的にはバルト沿岸に立地し、東西方向ではオボドリト人地域のほぼ中心に位置した。多量に出土する土器のほとんどが古スラヴ期と編年され、同時に複数の井戸などの木材遺構による年輪年代測定によっても、いずれも8世紀前半という編年が得られた。この結果、立地及び編年を根拠としてグロース＝シュトロエームケンドルフがレーリックと比定され、現在この結論は受容されるに至っている⁷⁾。

II) 立地条件

交易地には特徴的な立地条件があり、沿岸にはなく、河川・水路で海と通じ

6) この論争については以下の論稿が整理している。Herrmann [16], S.91-92, Wieterzichowski [39], S.44-45.

7) Jöns [22], S.130-131.

(5) 中世前期バルト南岸のスラヴ人交易地について

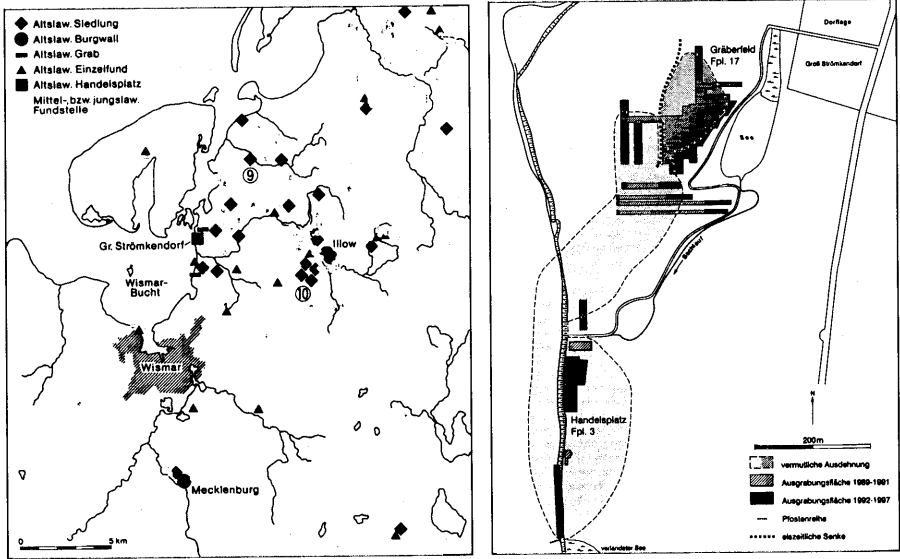
た、内陸部に設けられた。ロストック＝ディルコウは、ヴァルノウ河の河口から10km上流で、これに東側から合流する支流のさらに1,5km上流に位置する。(図Ⅲ参照)

これに対してグロス＝シュトロームケンドルフの場合はポエル Poel 島に隔てられているとはいえ、ヴィスマール湾に面し、バルト海とじかに接しており、この立地条件には妥当していないように思われる。しかし、近年の地質学及び花粉分析研究によると、この集落が形成された当時は今日よりも1m海水位が低かったと判明しており、海岸線は今日よりも西側に、ポエル島近くまで張り出していたと考えられ、従って直接バルト海に面することはなかったと見なされる⁸⁾。(図Ⅱ参照)

交易地は海岸線近くに見いだされる例があるとはいえ、バルト海を巡る遠隔地との交流が推定されながらも、直接海に面することがない。沿岸を嫌い、バルト海から隔てられた事情については、嵐などの自然の災厄に対する防御も想定されているが、むしろ海からの襲撃を警戒して、外海から直接には認知されないように、内陸に入り込んだ地点が指向されたと考えられる。同時にまた沿岸を避ける要因ばかりでなく、内陸に誘因も考慮されよう。グロス＝シュトロームケンドルフは東へと遡上する川沿いであり、またロストック＝ディルコウは、北西に遡上して、オボドリト人拠点シュヴェリン付近を源とするヴァルノウ川沿いであった。バルト海をつなぐ河川・水路ばかりでなく、より内陸へとつながる水上交通の機会もあったということになる⁹⁾。こうした交通上の利便によって、交易地近隣への定住地の集中という現象が見いだされたと考え

8) 現在特に波による浸食が激しく、葦など植生の欠けているところでは年に20～30cmも海岸が削り取られているという。このため当時の海岸線と西側に展開していると推定される集落跡については明確にされ得なくなっている。Jöns [22], S.136.

9) 同時期中部ボンメルンの内陸水上交通を検討したフィリポヴィアクによると、丸木舟など小舟を用いた内陸水上交通網がオドラ川上流まで証明された。Filipowiak [10].



図Ⅱ グロース・ストロームケンドルフ遺跡 (Jöns [22]) および近隣遺跡分布図 (Jöns/Luth/Müller-Wille [23])

られるが、この点は後に検討しよう。

Ⅲ) 定住構成

交易地遺跡は、塁壁が盛り土の状態で付近から際立つ防備定住地とは異なり、明確なランドマークが見あたらないため、発掘調査開始以前に定住の全体像を予想することがより困難である。さらに本稿で扱う2つの交易地では、個々の建築物の構成も明確ではなく、くぼみや変色から住居の存在が推定されるだけである。こうした限界はあるものの、大規模かつ入念な調査により、ある程度の姿が判明してきている。

グロース＝シュトロームケンドルフは南北に700m東西に250m、全体で17haもの大規模な定住地である。このうち、北西に1.7haの墓地、この南に中央

(7) 中世前期バトル南岸のスラヴ人交易地について

集落、小川をはさんでさらに南集落が広がる。規模の大きさのために発掘は敷地全体にではなく、浸食の危険のある海岸を中心に、いくつかの部分に分けて取り組まれてきた。

1992年までに発掘された地域は、面積としてはきわめて限定的ながら個々の建物址の性格についてはある程度の推定が可能となっている¹⁰⁾。南集落南端にある明確な柱痕を伴うやや窪みのある建物の場合、板状鹿角3枚を重ねて加工した櫛(3層櫛)片、鋸切断された鹿角から櫛製造との関わりが推定され、さらにアイフェル産玄武岩片をはじめ、円形青ガラスビーズ、青ガラス片など、西欧など遠隔地で生産されたと考えられる遺物が出土する。なお、この建物の南側土台下に馬の頭蓋骨が埋められており、スラヴ的な祭礼の遺構と見なされる¹¹⁾。北端の建物では、300箇以上の加工片が集中していることから鹿角加工が推定される。西に接した2棟の建物址では、5kgを越える鉄鋳滓と炉址も見いだされるため、鉄鍛冶が行われたと考えられる。これらの南に隣接する柱建物からは琥珀ビーズや原料が集中しており、そこでの琥珀加工を推定させる。

1992年以降やや規模を拡大して取り組まれた南集落の中心部では、小規模な竪穴建物(7~20m²)20戸が南北に、約10m間隔で3列配置された¹²⁾。2棟の竪穴建物では、床上に残った鍛冶ハンマー、鍛冶鋳滓、多数の鉄片から鉄鍛冶との関連が推定され、別の竪穴建物でもさらに、未加工の琥珀・琥珀加工屑と加工途中の鹿角から琥珀加工と鹿角加工が推定された。また個別の施設との関

10) Wieterzichowski [39], S.14-23.

11) 馬骨はスラヴ祭礼との関わりが推定される。定住地遺跡としては、他とは区別される建物の土台から馬の骨が見いだされており、こうした施設は土着宗教との関連が推定された。オルデンブルク：市原1991, 47頁, Gabriel [12], S.75-77.ノイブランデンルク・ファンフヴァダー島：市原1996, 48頁, Schmidt [28], リューゲン島ラルスヴィーク, Herrmann 1983. グロース＝ラーデン：Schuldt [31], S.49. 記述史料上では、オーデル流域スラヴ人が祭祀のために馬を飼育していたことは、リューゲン島スラヴ人について13世紀前半のサクソ『デーン人の事績』が言及している。Saxo Grammaticus [26], S.566.

12) Jöns/Luth/Müller-Wille [23], S.215-216, Jöns [22], S.138.

連は明確ではないが、周辺の廃棄物用穴からはガラス、鉛、青銅溶融屑が出土し、集落内での加工・冶金が推定された。なお、エルベ・オーデル間北東部では正方形竪穴建物はまれとされているが、グロース＝シュトロエームケンドルフでは竪穴式の建物が優勢であり、この点が非スラヴ的な要素の強さ、すなわちザクセンや北欧などの影響とする見解もある¹³⁾。

ロストック＝ディルクウには、低地の集落とその西に位置する100m径の丘上の集落が確認されている。前者は東西60m、南北100mが発掘され、平地住居とみられる正方形から長方形の浅いくぼみが並ぶ旧層と、低地の縁に不定形の穴が分布するだけの新層の2層が明らかになっている。この集落の井戸の木材の年輪年代測定から8世紀後半から9世紀初頭という編年が得られた。

個々の建物と遺物との直接的な関係は明白に報告されていないが、集落全体から多様で大量の手工業活動に関わる遺物が出土しており、いくつかの手工業活動が推定される。大量の製鉄鉾滓と手のひら大の鍛冶鉾滓、そして半製品である鉄板やナイフ、鍛冶道具である鍛冶鋏、鉄床、金切りばさみなどから製鉄と鉄鍛冶が考えられている。ただし後2者は、青銅鑄片や鑄型、青銅板なども出土することから青銅冶金の証拠ともみなされる。3層櫛の頻出や半製品である鹿角の小板などから鹿角加工も推定される。また琥珀の多量の製品と原料は琥珀加工を、多様な色のガラス片やガラス棒によりガラス細工が推定できる¹⁴⁾。

出土遺物中で特に興味深いのは、集落北端の、年輪年代測定で817年とされた井戸から出土した皮袋である。この皮袋から真鍮棒3、亜鉛棒2、刻印のあ

13) エルベ・オーデル間の建築様式を網羅的に検討したドナートによると、北東部で支配的な形式は丸太造りとされ、ここで優勢な正方形竪穴式はきわめて例外的とされている。Donat [8], S.83-85.ただしヨェンツは、ドナートの分析からすでに20年経過し近年西北地域ながら若干のスラヴ人定住地で同様な正方形竪穴建物が見いだされていることなどを挙げて、この地域において支配的な建築様式を語るには農村定住における建物の分析がまだ十分な調査されていない、と結論を保留している。Jöns [22], S.138.

14) Warnke [36], S.71-73.

(9) 中世前期バトル南岸のスラヴ人交易地について

る鉛型、試金石が見いだされた。他に北欧風の銀製剣柄頭、ザクセン地方で副葬品として頻出するガラスビーズ、銀箔付ガラスビーズなども含まれており、内容構成から「金細工師の皮袋」と呼ばれ、当地における手工業活動、もしくは外来手工業者の証拠とも考えられている¹⁵⁾。

交易地では、多様な種類のそして大規模な手工業活動の跡が見いだされる。しかも、交易地以外の集落遺跡からは見いだされない琥珀やガラス細工などの手工業活動址が確認された。これら定住部の遺構からはこの集落が交易・手工業活動において際立った位置を占めていることを十分に明らかにしているが、その担い手や建物毎の構成が明らかになるような、たとえばラルスヴィークにおける屋敷のような状況は明らかになってはいない。交易地以外のスラヴ社会の水準から大きく乖離した経済活動を示す証拠や、手工業活動痕と同時に出土する外来品から、外来手工業者・商人の定住民構成における割合の高さを主張する見解もあるが、これについては後に検討しよう。

IV) 交 易 活 動

交易地では出土する遺物から西方・北方など遠隔地との交流を見て取ることができる。グロース＝シュトロームケンドルフでは、西方からの交易品として、ライン流域アイフェル産玄武岩白石片が集落全体から分散し、同様にライン流域製造の遺物としてはバードルフ土器や水晶珠、オーディンとドラゴンを刻印したとみなされる銅製スキアット貨が出土した。フリースラントからとしては、ろくろ加工土器や漏斗状ガラス杯、また従来最東でもアルト・リュウベックまでしか出土していなかった貝殻粉土器などが見いだされた。また千花模様ガラスビーズ及びその断片もある。これらは元来西アジア製であるが、メロヴィング期行列塚式墓地に副葬品として知られており、西方からの流入品と見なさ

15) Warnke [37].

れる。北欧からの遺物としては、リング付きピン、モザイクガラス、9世紀半ばのビルカの副葬品として知られるリングブローチや赤黒色フリント砥石が出土した¹⁶⁾。

ロストック=デイルコウでは先述した皮袋に、剣の銀製柄頭・鐔・柄、そして総計100ヶ以上の緑色鉛ガラスビーズと金・銀箔付彩色ガラスビーズが含まれていた。柄など剣の握りはデンマーク・ノルウェーなど北欧で類似の装飾が見いだされ、特に素材に貴金属を用いた例は9～11世紀には非西欧的とされている。彩色ガラスビーズは通常モザイクガラスビーズと併せて、シリア・エジプト方面からの輸入品とみなされ、それらが1組をなしてザクセン地方などの墓地で出土する¹⁷⁾。他に集落からは、北欧からの外来品として、北欧で製造された鳥形青銅ブローチ、エーランド製造と類似の装飾文様が見いだされる楕円皿形ブローチが見いだされた。西欧からの遺物としては、アイフェル産玄武岩白石片やバードルフ土器、ザクセン製造と類似の獣頭装飾楕円銀ブローチ、フリースラント製貝殻粉土器・ターティング・ポットも出土した。また、錫と青銅の象眼細工バックルと留め金具も、フランク人地域で製造されたと考えられている。なお、メクレンブルク地方内の交流を示す遺物として、メンツリンで類似物が出土した左右対称形仮面青銅ブローチも出土した¹⁸⁾。

同時期には交易地でのみ見いだされる、遠隔地からの、多様な外来品が交易活動を推定させる。西方特にライン中流から下流域の製品、たとえば玄武岩石臼、土器・ポット、ガラス製品、あるいは北欧からは、たとえばブローチである。これらの遺物は点数も少なく、破片や部分として出土することが多いが、もっぱら交易地だけで見いだされる。輸入品として交易のためにもたらされたのか、外来者が持参した生活用品と考えられるかは論議となっている。

16) Wieterzichowski [39].

17) Steppuhn [32], Geibig [13].

18) Warnke [36], S.74-76.

(11) 中世前期バトル南岸のスラヴ人交易地について

V) 葬 制

エルベ・オーデル間スラヴ人定住地域における農村定住地では従来、定住地に付属した墓地を見いだすことはまれである。これに対して、リューベックやオルデンプルクのような防備定住地には墓地が見いだされる。そこではきわめて豊かな副葬の少数の墓が防備施設＝定住地内施設に付置され、これにより防備施設自体が少数の有力者によって排他的に利用・居住されていると想定された。他方、交易地においても付属する墓地が見いだされるが、個々の墓にはさほど豊かな副葬はなく、墓と定住地内施設とは明確に切り離されていた。すなわち交易地においては、特に豊かな副葬の施された墓が見いだされず、定住部内施設と個々の埋葬体とのつながりがみとめられない点で、墓地が有力者に限られず、一般の住民が埋葬された場所と見なされる。

グロース＝シュトロームケンドルフでは、集落北の、小川と沼に囲まれた1,7haに、総数68基の墓地が広がり、この内ほとんど(44基)が火葬で、約3分の1(15基)が土葬である。副葬品を伴う墓は全体の半分を占めるが、その多くは土器片や家畜骨などであり、若干の場合にのみ装身具と日用品がある¹⁹⁾。

特に注目されるのは、スラヴ地域ではまれだが、北欧や西欧ではよく知られた舟を伴う葬制3例である。これらの内最小の例は副葬を伴わない土葬であって、上体の体側に各1列、そして骨盤部分に舟鋌が残っており、ここから小舟を用いたと推定される。第2例は地中の穴に火葬で埋葬した火葬土壙墓で、この墓を中心に、2体が重葬された木棺墓2基と土葬土壙墓1基が取り囲むように配列された。墓の延長上に鋌が4列、全長3mにわたって残っており、舟址と見なされた。第3例はもっとも大きく全長9.5m、幅1.8m、約400本の釘が6列にわたって残った。舟址中央には、火葬体と舟鋌1本だけが納められた古

19) Jöns/Luth/Müller-Wille [23], S.207-214.

スラヴ期に属するズコウタイプ骨壺が置かれた。副葬品としては、骨壺と並んで割られた土器片と折られた刀身片が出土したほか、3角形柄頭や柄、鏝など刀剣の残りの部分が全体に分散して見いだされた。土器は、並んで置かれた骨壺が完全体のままでいることから、埋葬後に土中で割れたのではなく、葬礼として予め割られていたと見なされている。刀身片については同様な様式が8世紀後半のネーデルラントやヴェストファーレン、東フリースラントで副葬品として見いだされている。またこの墓に接して錆びた鉄枷と獣骨が出土しており、犠牲として副葬された動物と見なされている。

ここでの舟墓の内少なくとも後2例では、鉄製鋌を用いた板張り舟 plankenboot であり、木製ダボ継ぎが一般的なスラヴ人地域では例外的である。また、板張り舟自体を墓として用いた埋葬は北欧や西欧ではよく知られているが、スラヴ地域ではまれである。ただし興味深いことには、同様な交易地であるメンツリンとラルスヴィークでは、舟材を火葬の際に用いて、盛り土墓や骨壺の中に遺骨とともに収納している例が見いだされている。同様に、第3例にみられる動物の副葬も、エルバ・オーデル間では知られていないが、同時代の北ドイツでは周知である。

火葬墓で注目されるのは、壙内に木炭と長さ4 cm以上の鉄釘・鋌70、西に隣接して首と骨盤を除いて全身の揃った馬骨を備えた例である。これは火葬車葬墓と考えられ、西欧ではメロヴィング期に類例が見いだされる。バルト南岸ではオルデンプルクとラルスヴィークにだけ類似の車葬墓が明らかになっている。別の火葬墓例では、厚板で四辺を囲まれ、基底には木材ないしは編み枝を敷いた木郭墓がある。木郭墓は晩スラヴ期に土葬としてよく知られたが、ここでのように早期に火葬としてはまれであり、9・10世紀では南北欧で、あるいは6～8世紀にフランク・ザクセン地域で見いだされている。また、火葬骨壺墓は晩スラヴ期には一般的な葬制であるが、ここでの骨壺は古スラヴ土器であり、対応する時期であれば、リーベヤビルカ、フリースラント・ザクセンで一

(13) 中世前期バトル南岸のスラヴ人交易地について

般的とされている。ただしエルベ・オーデル間では、交易地であるメンツリンと後述するロストック＝ディルコウなどでだけ認められた²⁰⁾。

土葬は墓地全体において高い割合を占めているわけではないが、北西スラヴ地域において最古の土葬墓地の1つである。北西スラヴは元来火葬であり、次第に土葬に推移したが、これはキリスト教とのコンタクトによる影響と推測されており、この点でも外来の風習がこれらの交易地を通じて早期にもたらされていたことが推定される。

ロストック＝ディルコウ自体には現在のところ大規模な墓地は見いだされず、付近も含めて数基が確認されただけである。定住地に隣接した火葬骨壺墓は1基のみであるが、グロース＝シュトロームケンドルフで認められたような古スラヴ土器骨壺葬である。また、西に1 kmほど離れた、ヴァルノウ沿い Gehlsdorf からは男性土葬体2つが1組で見いだされているが、片方からは古スラヴ期に編年されるフェルトベルクタイプ土器が副葬品として出土しており、グロース＝シュトロームケンドルフとならぶ最古の土葬墓とみられている²¹⁾。

交易地における墓地では、若干の外来副葬品とあわせて、舟・車葬、土葬などの葬制からも、西方ないし北方からの文化的影響の深さと早さが見いだされた。またさらに、グロース＝シュトロームケンドルフにおいては、葬制や土葬の向きなどに統一性が欠如していることから、土着の集団の共同墓地とみるよりは、外来者の墓地とする見方もある²²⁾。ただし、墓のほとんどを占める火葬風習やスラヴ製骨壺など北西スラヴ人に一般的な葬制や副葬品も見いだされており、外来葬制の影響は色濃いとはいえ、スラヴ固有の葬制が墓地全体を規定した墓地全体を規定しているとも考えられる。

20) メンツリンの墓地については Schoknecht [29], S.30

21) 火葬骨壺墓については Warnke [35], 土葬墓については Wüstemann [40].

22) Jöns/Luth/Müller-Wille [23], S.134.

VI) 後 背 地

遺物や定住地内施設から、交易地は多様で高度な手工業活動施設から成り立っていたことが推定されるが、交易地が非農業生産に特化した定住地であったとすると、そこで生活する住民への食糧供給などにかかわって、近隣集落との分業関係の問題が浮かび上がる。(表①参照)

グロース＝シュトロエームケンドルフでは数 km 東に位置する同時期の防備定住地 Ilow との間に定住地が集中していた。中でも特に注意を引くのは、グロース＝シュトロエームケンドルフ海岸部から約 1 km 東の定住地である。ここではただ建物 1 棟だけが限定的に発掘されただけであるが、グロース＝シュトロエームケンドルフ中心集落を上回る量の加工途中の琥珀及びガラスビーズなどが発掘された。これは近隣農村定住地からの交易地への製品供給を表す 1 例と見なされている²³⁾。また付近からは貨幣財宝などが出土しており、東 7 km の Steinhausen と南西のヴィスマールから 9～10 世紀のアラブ貨などが出土している。またグロース＝シュトロエームケンドルフ放棄後 11～12 世紀になるが、北 4 km の Blowatz ではドイツ貨 275 枚が出土した²⁴⁾。(図 II 参照)

ロストック＝ディルコウの場合、ヴァルノウ右岸を中心として周辺の新スラヴ期には定住地約 20 が分布し、その中にはヴァルノウ上流で、若干のドイツ貨が出土した防備定住地フレーゼンドルフも認められる。10 世紀頃にはロストック＝ディルコウ自体の定住は放棄されるが、対岸にアラブ貨も出土した防備定住地が形成され、近隣の定住地総数も約 50 に増加した。また、8 km 南の Niex でアラブ貨が出土しているほか、11 世紀以降のドイツ貨が 6 km 南東の Ikendorf、6 km 南の Kessin、2 km 北西の Gehlsdorf で出土した²⁵⁾。(図 III 参照)

23) Wieterzichowski [38].

24) Steinhausen: Herrmann/Donat [20], S.15, Wismar: Herrmann/Donat [20], S.16, Blowatz: Herrmann/Donat [20], S.5.

(15) 中世前期バトル南岸のスラヴ人交易地について

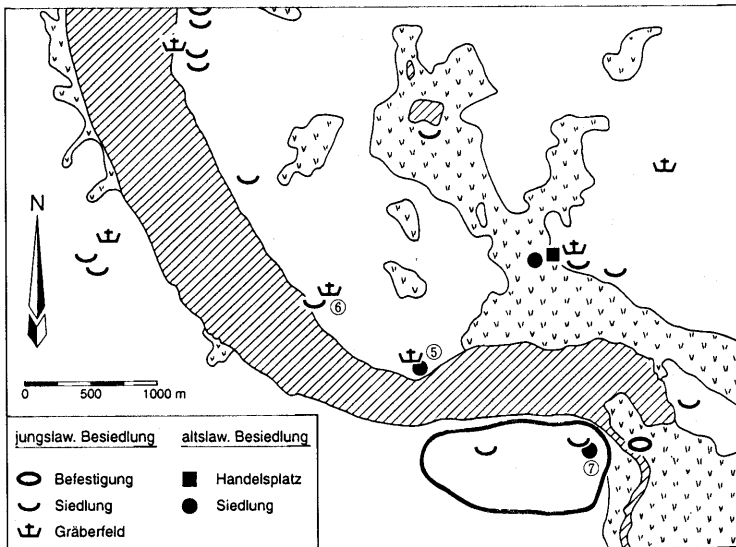
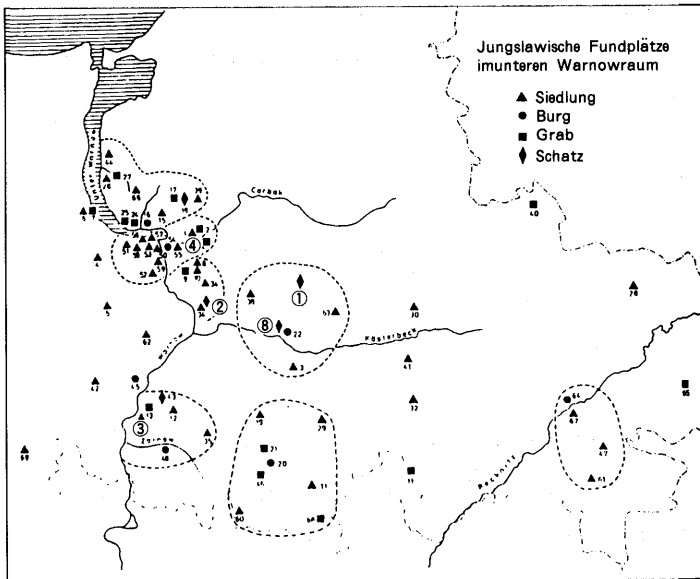
表① 交易地の近隣に分布する定住地と埋蔵貨幣

中心となる交易地	地図番号	近隣定住地ないし個別遺物	遺跡ないし遺物種別	交易地からの距離	特徴的遺構・遺物
ロストック・デイルコウ	①	Ikendorf	埋蔵貨幣	南東 6 km	11世紀後半バルドヴィク貨
	②	Kessin		南 6 km	11世紀後半～12世紀ザクセン貨311
	③	Niex		南 8 km	10ないし11世紀初めアラブ貨
	④	Alt Bartelsdorf	防備のない定住地	南 1 km	11～12世紀墓地 (148土葬), 青銅製女性装身具・秤, 近接した防備のない定住地
	⑤	Gehlsdorf	防備のない定住地	西 1 km	7～9世紀防備のない定住地, 土葬墓
	⑥	Gehlsdorf		北西 2 km	11～13世紀防備のない定住地, イングランド貨, 青銅製分銅, 土葬墓多数
	⑦	Rostock	防*	対岸 2 km	8～9世紀防備なし, 11～13世紀防備, アラブ貨
	⑧	Fresendorf	防*	南東 6 km	8～11世紀防備定住地, 若干のドイツ貨
グロース・ストロエーム	⑨	Steinhausen	農村定住地	東 7 km	9世紀初5250 g
	⑩	Blowatz		北 4 km	10～12世紀ザクセン, ドイツ貨275枚
		Ilow	防*	東 8 km	8～12世紀防備定住地 2, 年輪734年
		Wismar	埋	南西 8 km	9世紀初アラブ貨若干

※ 防：防備定住地

ここで興味深いのは、交易地が放棄された時期にも、同一地点ではないにしても、定住地の拡大と継続が見いだされるという点である。交易地の放棄後は、交易地における経済活動の水準に匹敵する、大規模な防備定住地が生じて

25) Fresendorf: Herrmann/Donat [20], S.29, Rostock: Herrmann/Donat [20], S.40, Ikendorf; Kessin; Niex: Herrmann/Donat [20], S.30-32., Gehlsdorf: Herrmann/Donat [20], S.37,



図Ⅲ ロストック・デイルコウ遺跡 (Warnke [36]) および近隣遺跡分布図 (Wüstemann [41])

(17) 中世前期バルト南岸のスラヴ人交易地について

いる。交易地放棄後の貨幣出土に見いだされるように、交易地が切り開いた、遠隔地交易を展望した近隣間の物資流通が、交易地放棄後にもより拡大した経済活動へと展開しているとも考えられよう。

Ⅶ) ま と め

近年の発掘成果により、従来漠然としていたバルト南岸交易地に関わる認識が次第に深められつつあるといえよう。本稿であつかった2定住地は従来大集落としての存在すら知られていなかったのであり、特に90年代になってから詳細な知見を得るところとなった。これにより、従来から知られていたラルスヴィーク、メンツリンは西スラヴ社会の中で例外的な定住地とみなされえなくなり、バルト南岸交易地についての総合的な検討が可能となった。また、ただ検討対象の数量が拡大しただけでなく、先行して見いだされていた交易地遺跡では提起されなかったあるいは不十分であった課題へも分析への糸口を提供している。

これらの集落の発掘を実際にになった研究者はどのようにその姿を再構成しているのだろうか。交易地グロース＝シュトロエームケンドルフの発掘を手がけ、注目を集める契機を作った研究者であるヴィータツィコフスキは以下のように交易地像をまとめた。

交易地の住人は少数の商人と、ほとんどは手工業者である。前者と、後者のごく一部は外来者であり、琥珀加工や鹿角加工に従事していたのはほとんどが元々の住人であるスラヴ人である。外来者ばかりでなく、スラヴ人を含むすべての交易地住民は手工業に特化しているのであって、食糧はもっぱら近隣定住地から供給される。交易には2つのタイプがあり、1つは遠隔地、すなわちフランク、北海沿岸、北欧などとの交易、第2には周辺、後背地との交易である。

交易地の本質を規定するのは、第1に部族君侯の居所との空間的な結びつき、第2に沿岸近くの自然的な条件での防備、人工的な防備の欠如である。すなわち交易地は、沿岸の良好な交通条件を生かして、後背地たる内陸のスラヴ人定

住地域に位置する政治的拠点に、上層へ向けて奢侈品を供給した。また、塁壁など防備による制約がないため、集落の規模は一定の空間に限定されることなく、広い面積を占めた。政治的拠点との関係によって、支配拠点に直接面した交易地は継続したが、そうでなければ、むしろ行政拠点が交易の中心なるという事態を生む。

ヴィタツィコフスキは、グロース＝シュトロエームケンドルフについて、シュヴェリン湖まで連なるスラヴ初期のオボドリト人中核定住地域を後背地とし、その政治的な中心である防備定住地メクレンブルクとの関係を強調する。また一方で、人工的には無防備とされた理由に、自然的防備だけでなく、『フランク帝国年代記』に言及されたような、デーヌ王・オボドリト侯両者へのこの地からの貢納による政治的中立性をあげる。9世紀前半の定住放棄については、地点としては連続してはなくても、後背地全体としての継続が、付近の集落からの貨幣・貴金属の出土によってあかされたとした²⁶⁾。

ロストック＝ディルコウに従事したヴァルンケの提示する像もまたヴィタツィコフスキとほぼ同じである。ただし、交易地に定住する土着民は農業及び手工業に従事し、ガラスビーズ製造・冶金は外来者と見なしている。そしてここではより明白に連続的な定住発展が語られた²⁷⁾。

これに対して90年代後半からグロース＝シュトロエームケンドルフ発掘を担当しているヨエンツはまとまった像を提示してはおらず、大枠の議論としてはヴィタツィコフスキの像を引き継いでいる。ただし、元来スラヴ的とされていたいくつかの要素が見直されており、地域定住史の展開の中に交易地を位置づけはするが、それを単純にスラヴ社会の内在的な発展とはしない。比較的早期からの西方からの、多面的な影響が強調されている点が特徴的である。たとえば葬制や住居建築様式、その他に武具など権威財の流通に見られる社会構成

26) Wieterzichowski [39], S.44-45.

27) Warnke [36], S.79-80.

(19) 中世前期バルト南岸のスラヴ人交易地について

の西欧的影響に関する論議が引き合いに出される²⁸⁾。

これらの交易地像を総合した上で、本稿であつかった2つの定住地は研究史上にどのような意味を持つだろうか。第1には交易地成立時期の早さである。従来から知られていたラルスヴィーク、メンツリンよりもやや早く8世紀前半には成立した。7世紀頃とされる北西スラヴ人定着から間もない時期に既に、西欧・北欧との経済社会文化交流の結節点が形成されていたということになる。

第2には文献史料との総合の可能性である。史料上いっさい言及されることのなかったラルスヴィーク、メンツリンと異なり、グロース＝シュトロエームケンドルフはレーリックとして交易地の時代から知られており、ロストック＝デイルコウも同時代の言及は欠如するが、ヴァルノウ対岸が引き続き中世都市として発展したことが明白になっている。

第3には定住地の展開過程、定住史解明への寄与である。史料との総合にも関わるが、北西スラヴ人社会における交易地の歴史的役割ないし位置解明への発端となった。2交易地は早期に成立・放棄され、地点としての連続性は乏しいが、交易地が担った役割の多くは引き続き時代にも近隣において連続している。ことに近隣における地域支配層の拠点たる防備定住地の成立と交易地の放棄とが関連して捉えられた。

バルト南岸スラヴ人定住史については、定着当初の農村定住あるいは大規模だが均質な壘内定住から、階層性の開始が小ブルクの成立で見いだされ、9世紀から10世紀の段階で初めて手工業・商人集落が大ブルク内部ないしその壘前定住として形成されるという、地域形成・展開の過程が描かれてきた。これに対して交易地を扱った研究は、現在までのところ新たな定住展開過程像を十分に説得的には描き切れてはいない。とはいえ、限定的ながら以下のような姿を提示している。8世紀、交易地は形成と同時に、西方、さらには北方との交流

28) Jöns/Luth/Müller-Wille [23], S.207-216. Jöns [22], S.138-141.

を持ち、高度かつ多様な手工業・交易活動を展開した。これはバルト海南岸では他の形態の定住地よりはるかに早期であった。しかしながら、社会政治的拠点は同時に別の場所に成立、併存していた。交易地が放棄されて後も、政治軍事拠点が経済活動上の拠点として現れるが、全体として定住面積を拡大しながら、当該地域において経済活動はたたれることなく継続した。

文献リスト

- [1] Annales regni Francorum: *Ausgewählte Quellen zur deutschen Geschichte des Mittelalters*, Bd.5, hrsg. R. Buchner, 1978.
- [2] Ambrosiani/Clarke 1991: Ambrosiani, B./ H. Clarke, *Towns in the Viking age*, Leicester.
- [3] Ambrosiani/Clarke (Hrsg.) 1994: *Developments Around the Baltic Sea in the Viking Age. Birka Studies 3 (The Twelfth Viking Congress)*. Stockholm
- [4] Brachmann/ Vogt 1992: Brachmann, H./ H-J. Vogt (hrsg.) *Mensch und Umwelt. Studien zu Siedlungsausgriff und Landesausbau in Ur- und Frühgeschichte*. Berlin.
- [5] Brather 1995: Brather, Sebastian, Nordslawische Siedlungskeramik der Karolingerzeit -Fränkische Waren als Vorbild?, in *Germania*, Bd.73, S.404-420.
- [6] Brather 1996: Merowinger- und karolingerzeitliches "Fremdgut" bei den Nordwestslawen Gebrauchsgut und Elitenkultur im südwestlichen Ostseeraum, in *Praehistorische Zeitschrift*, Bd.71, S.46-84.
- [7] Callmer 1994: Callmer, Johan, Urbanization in Scandinavia and the Baltic Region ca. AD 700-1100: Trading Places, Centres and Early Urban Sites, in Ambrosiani/Clarke 1994, 50-90.
- [8] Donat 1980: Donat, Peter, *Haus, Hof und Dorf in Mitteleuropa vom 7.-12. Jahrhundert. Schriften zur Ur- und Frühgeschichte* 33, Berlin.
- [9] Filipowiak 1982: Filipowiak, Władysław, Der Götzentempel von Wolin, in *Beiträge zur Ur- und Frühgeschichte, 2.Arbeits- und Forschungsgeschichte zur Sächsischen Bodendenkmalpflege*, Beiheft 17,

(21) 中世前期バトル南岸のスラヴ人交易地について

S.109-123.

- [10] Filipowiak 1997: Die Bedeutung der Binnenschiffahrt im Odergebiet, in *Germania* 75, S.481-493.
- [11] Filipowiak /Gundlach 1992: Filipowiak, W./H. Gundlach, *Wolin Vineta. Die tatsächliche Legende vom Untergang und Aufstieg der Stadt*, Rostock.
- [12] Gabriel 1984: Gabriel, Ingo, Strukturwandel in Starigard Oldenburg während der zweiten Hälfte des 10. Jahrhunderts auf Grund archäologischer Befunde: Slawische Fürstenherrschaft, ottonischer Bischofssitz, heidnische Gegenbewegung, in *ZfA (Zeitschrift für Archäologie)*, 18, 1984, S.63-80.
- [13] Geibig 1992/93: Geibig, A, Der Hort eines Edelmetallschmiedes aus der frühslawischen Siedlung Rostock-Dierkow. Die Schwertgefäßteile, in *Offa* 49/50, S.215-227.
- [14] Herrmann 1980: Herrmann, Joachim, Über das historische und siedlungsgeschichtliche Umfeld des Seehandelsplatzes Reric zu Beginn des 9. Jahrhunderts, in *Offa* 37, 201-207.
- [15] Herrmann 1982 (hrsg.): *Wikinger und Slawen. Zur Frühgeschichte der Ostseevölker*, Berlin.
- [16] Herrmann 1984: Reric - Ralswiek - Groß Raden. Seehandelsplätze und Burgen an der südlichen Ostseeküste, in *Lübecker Schriften für Archäologie und Kulturgeschichte* 9, 91-96.
- [17] Herrmann 1984: Ralswiek Seehandelsplatz, Hafen und Kultstädte. Arbeitsstand 1983. in *AuF (Ausgrabungen und Funde)* 29, S.128-133.
- [18] Herrmann 1985: Hofverband und Handwerksproduktion als Grundlage des frühgeschichtlichen Handels im Ostseegebiet. in *Society and trade in the Baltic during the Viking Age (Acta Visbensia 7)*, S.55-62.
- [19] Herrmann 1991 (hrsg.): *Frühgeschichte der europäischen Stadt im Mittelalter*, Berlin.
- [20] Herrmann / Donat 1973: Herrmann, J. / P. Donat, *Corpus archäologischer Quellen zur Frühgeschichte auf dem Gebiet der DDR (7. bis 12.Jahrhundert)*, Bd.1-4, Berlin,.
- [21] Herrmann / Heußner 1991: Herrmann, J. / K-U. Heußner,

- Dendrochronologie, Archäologie und Frühgeschichte vom 6. bis 12. Jh. in den Gebieten zwischen Saale, Elbe und Oder, in *AuF* 36, S.255-290.
- [22] Jöns 1998: Jöns, Hauke, Der frühgeschichtliche Seehandelsplatz von Groß Strömkendorf, in Lübke 1998, S.127-144.
- [23] Jöns/Luth/Müller-Wille 1997: Jöns, H./ F. Lüth/ M. Müller-Wille, Ausgrabungen auf dem frühgeschichtlichen Seehandelsplatz von Groß Strömkendorf, Kr. Nordwestmecklenburg, in *Germania*, Bd.75, 1997, S.193-221.
- [24] Lübke 1998: Lübke, Christian (hrsg.) *Struktur und Wandel im Früh- und Hochmittelalter. Eine Bestandsaufnahme aktueller Forschungen zur Germania Slavica*, Stuttgart.
- [25] Müller-Wille 1995: Müller-Wille, Michael, Two early medieval sites near Wismar and Rostock at the southern Baltic Coast, in *Olsen/Madsen /Rieck* (hrsg.) 1995, S.89-96.
- [26] Olsen/Madsen/Rieck 1995: Olsen, O./J.S. Madsen, /F.Rieck, (hrsg.) *Shipshape. Essays for Ole Crumlin-Pedersen*, Roskilde.
- [27] Saxo Grammaticus, *Gesta Danorum*, hrsg. Alfred Holder, Strassburg, 1886.
- [28] Schmidt 1984: Schmidt, Volker, *Lieps. Eine slawische Siedlungskammer am Südende des Tollensesees*. Berlin
- [29] Schoknecht 1977: Schoknecht, Ulrich, *Menzlin. Ein frühgeschichtlicher Handelsplatz an der Peene*, Berlin.
- [30] Schoknecht 1978: Handelsbeziehungen der frühmittelalterlichen Siedlung Menzlin bei Anklam, in *ZfA* 12, S.225-234.
- [31] Schuldt 1985: Schuldt, Ewald, *Groß Raden. Ein slawischer Tempelort des 9/10. Jahrhunderts in Mecklenburg*. Berlin.
- [32] Steppuhn 1992/93: Steppuhn, Peter, Der Hort eines Edelmetallschmiedes aus der frühslawischen Siedlung Rostock-Dierkow. Die Kette mit Bleiglasperlen, in *Offa* 49/50, S.207-213.
- [33] Warnke 1981: Warnke, Dieter, Eine Bestattung mit skandinavischen Schiffsresten aus den "Schwarzen Bergen " bei Ralswiek, Kreis Rügen, in *AuF* 26, S.159-165,
- [34] Warnke 1991: Ein Brunnen mit Hortfund eines Goldschmiedes aus der

(23) 中世前期バルト南岸のスラヴ人交易地について

- 1.Hälfte des 9. Jh. vom Handwerkerplatz Rostock-Dierkow. in *AuF*, Bd.36, S.294-295.
- [35] Warnke 1992: Eine Urne der Sukower Gruppe aus der frühstädtischen Siedlung Rostock-Dierkow, in *AuF* 37, S.156-161.
- [36] Warnke 1992: Rostock-Dierkow – ein Wirtschaftszentrum des 8./9.Jahrhunderts and der Unterwarnow, in *Zeitschrift für Archäologie des Mittelalters*, 20, S.63-80.
- [37] Warnke 1992/93: Der Hort eines Edelmetallschmiedes aus der frühslawischen Siedlung Rostock-Dierkow, in *Offa* 49/50, S.197-206.
- [38] Wieterzichowski 1989: Wieterzichowski, Frank, Zur Verbreitung und Entwicklung der Sukower Gruppe in Mecklenburg, in *Bodendenkmalpflege in Mecklenburg*, 37, S.37-102.
- [39] Wieterzichowski 1993: *Untersuchungen zu den Anfängen des frühmittelalterlichen Seehandels in südlichen Ostseeraum unter besonderer Berücksichtigung der Grabungsergebnisse von Groß Strömkendorf, Wismar Studien zur Archäologie und Geschichte*, Bd.3.
- [40] Wüstemann 1981: Wüstemann, Harry, Slawische Bestattungen vom Fährberg in Rostock-Gehlsdorf, in *Bodendenkmalpflege in Mecklenburg*, 21, S.239-244.
- [41] Wüstemann 1992: Zum slawischen Landesausbau an der Warnow, in Brachmann/Vogt 1992, S.177-122.
- [42] 市原1996: 市原宏一「前ドイツ植民期メクレンブルク東部のスラヴ人拠点について」, 『大分大学経済論集』47巻5号31～58頁
- [43] 市原1997: 「南部バルト海沿岸西ボンメルンのスラヴ人交易定住」, 『大分大学経済論集』49巻2号1～27頁